メリュジーヌを拾った人間君のお話

かゆ、うま2世

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
性懲りも無く新しいシリーズを……
でもメリュジーヌを拾いたかった、この気持ち、何……？

目　次

出来損ないとメリュジーヌ ―――――――― 1
出来損ないの一日 ―――――――― 7

出来損ないとメリュジーヌ

「はぁっ、はぁっ、はぁっ――――！」

背後から聞こえる数多の怒号から少しでも離れる為、必死で足を動かす。今だけは、このよくできている体がありがたい

もっとも、その体のせいでこんな目に遭っているのだが

妖精國における人間の在り方。それは言ってしまえば家畜だ

……いや、まともな生き物のように繁殖すらできない事を考えると、家畜以下かもしれない。寿命はせいぜい三十年。妖精達によって作られる工業製品のような……家畜からどんどん離れてないか？

とにかく、そうやって作られている以上、何処かでミスは生まれるわけで

そのミスこそが、この俺と言うわけだ

俺が生まれた時、俺という存在にあるものが混じった。やけにボロボロな魂の一欠片だ。恐らく妖精のものだろう

妖精の魂の欠片が俺に混じった事で、俺という人間は、他の人間とはかけ離れた存在となった

寿命は恐らくない。生まれた時から大人の体をしていた。もちろん、精神も。身体能力だって妖精の兵士に引けは取らない程だったし、生殖機能だって持っているようだった

だから、俺は出来損ないと呼ばれたわけだ

生産者は、不良品を世に出さない。俺という不良品を、生産者である妖精達がそのままにしておく筈も無かった

「こっちだ！逃がすな！」

「追いかけろ！」

「はあっ、はあっ、クソッ！」

不良品として処分される前に、俺は人間牧場から逃げ出した。死に

たくなかった。たったそれだけの事だ
わかっていた。逃げ切れる筈がない事も、もし仮に逃げ切れたとしても、まともな生活なんて送れないことも
それでも俺は、死ぬ事が何よりも怖かったのだ
平原、森の中、色んな所を走り抜け、今は泥の上を走っていた
確か、湖水地方とか言ったっけ
もう何日間かぶっ通しで走り続けている。本当に、よくできた体だ

「……!森……!」

森の中へ入ろうと、一層速く足を動かす。しかし――

「っ!クソッ!」

右足のふくらはぎに感じる鋭い痛み。矢が刺さった事は見なくても理解できた
右足を引きずりながら森の中へと逃げ込み、木々の間を通り抜けていく
速度は明らかに落ちている。確実に追いつかれる
俺は、ここで終わる

「急げ、急げ……!」

恐怖を振り払うように、無理矢理足を動かして進んでいく
やがて、沼に辿り着いた
何やら大きな……岩?いや違う、生き物か何かの……

「……考えても意味ねぇってのに」

急に全てがバカらしくなって、沼の側に座り込んだ
クソみたいな人生だった。生まれて……出来損ないだったから殺

される
本にしたなら一ページも書けないで終わる人生だ。なんとつまらん物語だろうか
あぁ、でも
死ぬのは怖いが、それ以上に嫌だった事が一つあった
孤独だ
妖精と人間は違う。人間と俺は違う
俺はこの世界に親しい誰かどころか、種としての同族すらいない
それがたまらなく嫌だった
せめて、誰か――

「……いた」
沼の中で蠢く何か。お世辞にも生き物と呼べないような何かだったが、わかる
こいつは、生きている
妖精ではない、人間でもない
なら、俺と同じ孤独な何かだ

「よっこいしょ……」

汚い沼の中に手を突っ込んで、その肉塊を引っ張り上げる
意思すらあるかどうかわからない肉塊
でも、俺と同じ孤独な”何か”
それだけで、救われたような気がした
だから、それには酷く驚いた

「――――え？」

肉塊から泥が剥がれ、段々とその形を変えていく。泥は、一つの形を形成していった
美しい少女だった。髪も肌も真っ白な、人形のような美しさを持つ

女の子だった
黒い角と翼のようなものが付いている。妖精にも翅を持つものはいるが、それとは全く違う
妖精とも人間とも違う、もっと高位の存在だと直感的にわかった
「…最悪な奴に拾われたな」
そのままお姫様抱っこで持ち上げ、歩き出す……軽い
「俺はもうすぐ死ぬけどさ、お前ぐらいは逃がしてやれそうだよ」
少女は一言も発さない。ただ俺の腕の中から俺を見つめるだけ。だがそれでいい。言葉は必要ない。だって、俺たちは同じだから
「俺と一緒に居たら、多分お前も殺されちまう。時間稼ぎぐらいはするから、さっさと逃げろ」
泥まみれの少女を優しく地面に下ろす。ただ呆然とこちらを見つめて立ち尽くしている
「居たぞ！」
「おいマジか!?早く逃げ――え？」
――一瞬だった
視界の悪い森の中ですら視認出来る程の距離にいた妖精達の首が、宙を舞った
「な……にが…？」
俺の目には、全ての首が寸分の狂いなく同時に切断されたように見えた

「……君を死なせはしない。私がいる限り、絶対にね」

白い少女が口を開く。透き通るような声だった
少女の体は返り血に濡れていた。しかし、それさえも彼女を美しく見せる要素の一つにしかならなかった

「怪我はない？」
「あ、あぁ…足をちょっと怪我してるだけだ、大した事ない。とりあえず、名前……いや、さっき産まれたようなもんだし、無いのか」
「うん。私に名前はない。好きに呼ぶといい」
「そうか……じゃあ、メリュジーヌ」
「メリュ、ジーヌ。うん、気に入った。ありがとう。君の名前は？」
「俺？俺はベセト。よろしく」

これが、俺と彼女……メリュジーヌの出会い
それからは怒涛の展開だった

「妖精騎士になったよ、ベセト！」
「はぇー、凄いじゃん」
「これでずっと一緒に居られるね！」
「……ん？」

どうやら俺の存在を容認する代わりに妖精騎士になったらしい。しないとこの國を焼くと女王に言ったとか
もう隠れ住む必要は無くなったとの事で、いつのまにか建っていた彼女の家に住むことになった

「ちなみに、今のベセトの立場は私の部下。ベセトは私のものだし、私はベセトのものだから、あんまり気にする必要は無いけどね」
「お、おう…？」

「ベセトに何かあったら妖精國を焼くから。だから――私から離れないでね？」

こうして俺は、國が滅びて二人仲良く死ぬまでの僅かな時間を、彼女と過ごす事になったのだ

出来損ないの一日

「て事があって、今に至る訳です。俺はどういう状況でこんな話をしてるんでしょうね」
「……そうか」

キャメロットの一室、俺はモルガン女王と一緒に大量の書類仕事を処理していた
立場上はメリュジーヌの部下なのだし、戦えても一般兵士程度の俺がこういった仕事に回されるのはごく自然なことだと思う
一緒に仕事してる人が普通じゃないんだけど

「何でこんな事聞きたがったんです？」
「興味だ」
「なるほど……」
「…何だその目は」
「いえいえ、聞いてたイメージと違うなって」

ここに来る前は『冬の女王』だとか聞いていたので、もっと冷徹な人かと思っていたのだが……
興味だとか、トリスタンの事だとか、人間牧場の妖精達よりよっぽどいい人に見える

「そうか」
「はい」

……気まずい
今の立場になってからはや数ヶ月。ガウェインにトリスタンに、ウッドワスとも意外と早く打ち解けたものだが、モルガン女王とは流石にキツい
立場の問題ももちろんあるが、それ以上に俺が彼女に抱えている負

い目が大きい
　メリュジーヌは俺の存在を容認させる為、女王にきょうは……取引を持ち掛けた
　俺の存在を容認しなければこの國を焼くと言った。メリュジーヌとモルガン女王が本気で殺し合ったらどっちが勝つのかはわからないが、どちらにしても被害は甚大だ、モルガン女王は取引を受け入れるしかなかった
　もちろんそのおかげで俺はこうして社会的地位を手に入れて生きている訳だし、俺がとやかく言えた話でもない。それはそれとして思う事がない訳じゃない

「……そう思い詰めるな」
「俺一言でも喋りましたっけ」
「私に隠し事はできん。お前が気に病む事はない。メリュジーヌがお前を想う気持ちはよくわかる」
「……バーヴァンシーとの事ですか」
「…待て、何故知っている」
「俺に混じった魂の欠片は…多分バーヴァンシーのものです。そこから……断片的にですが、記憶を。それを踏まえて何ですが……もっと構ってあげたらどうです？」
「……構う？」
「一緒に居て、話すだけでもいいですよ」
「……考えておく」
「考えてないですね」

　立ち上がってモルガン女王に近づく。どこか困惑したように立ち上がった彼女の背中を押して部屋の出口まで連れて行く

「何をする！」
「仕事はやっとくんで、今日は休んでバーヴァンシーの所に行ってあげてください！」

「だが、私は……」

何か言いかける前に、モルガン女王を部屋の外に追い出した。ドアを閉めると、ため息と足音が聞こえてくる

どっか行ったな、俺の勝ち

「……何でもいいが、幸せにな」

呟いてから、机の上に大量に積まれた書類に目を向ける

……やっぱ追い出さない方が良かったかな、と一瞬浮かんだ考えを振り払い、ペンを握った

「つっっっっかれた……!!」

ペンを置いて伸びをする。ずっと同じ姿勢で座りっぱなしだったせいで体がバッキバキだ

あー癒しが欲しい。具体的に言えばメリュジーヌが

「呼んだかい？」

「呼ぼうと思ってたところだ、どっから入って来たんだよ」

無言で手招きをし、素直に寄ってきたメリュジーヌを思いっきり抱きしめる。鎧ではなく私服なので抱き心地がいい。最高

「ん～……」

「……あったかいね」

「……そうだな」

仕事は済ませた。外が明るく、メリュジーヌが来てるという事は恐らく昼過ぎだろう。今日はずっとこうしてよ

「ねえベセト」
「ん？」
「働きすぎじゃない？」
「今休んでるし、そこまででもない」

メリュジーヌを抱きしめたまま仰向けに寝転ぶ。ベッドではないので固いけどまあいいや。

「……無理はしないでね？君に何かあったら――」
「國を焼かせはしないから安心しろ」
「……もう」

メリュジーヌは不満げに声を漏らす。そんな姿も可愛くてより一層強く抱きしめると、彼女は嬉しそうな顔をしてから俺の胸に顔を埋めた
すごい幸せ、ずっと続かないかなぁ

「陛下、少し――」
「あ」
「あら」

その時、部屋の扉を開けて入って来たのはガウェインだった。俺達を見るなり呆れたように溜息をつく

「……またか、メリュジーヌ、ベセト。仕事中だぞ」
「仕事は終わった～……てかモルガン女王に用があるなら今日は無理だぞ。俺が休みにした」
「いやそれ自体は急ぎの案件ではないからいいのだが……待て、お前が休みに？」
「うん。多分バーヴァンシーとなんかやってると思う。邪魔してやる

なよ」
「は、はぁ」
困惑したような声を出しつつ、ガウェインも床に座り込んだ
「それで……いつまでそうして…」
「今日は多分ずっと」
「……そ、そうか……仲が良いようで何よりだ」
そうして、今日一日は時折雑談をしつつ、三人で過ごした

日が落ち、暗くなった廊下をメリュジーヌと二人歩く。仕事帰り、というやつだ
「あ、ちょっと寄り道していい？」
「構わないよ。何処に？」
「モルガン女王の所。ちょっとでいいから大人しくしててくれ」
そう言って玉座の間に向かう。モルガン女王は玉座の後方で大穴を見つめていた
「どうでした？バーヴァンシーと」
「ああ……楽しそうにしていた」
「何があったかはどうでもいいですけど、楽しそうなら良かった」
「……世話になった。ところでだが……」
「はい？」
「お前にはバーヴァンシーの魂が混ざっていると言ったな」
「ええ」

「それなら……お前は私の息子と言えるのでは？」
「……は？」

唐突すぎて意味がわからず、思わず聞き返してしまった

「いえあの……どういう事ですか」
「お前にはバーヴァンシーの魂が混ざっている。バーヴァンシーは私の娘だ、つまりお前は私の息子だ」
「いやいやいやいや」

何言ってんのこの人、連続勤務でおかしくなった？

「……冗談だ」
「あ、ですよね……よかった」
「だが――」

モルガン女王は俺の顎に手を当て、軽く持ち上げて目線を合わせる。顔がいいから照れるんですけど

「……お前の心は、好ましい。いっそのこと本当に息子にでもなってみるか？」
「……陛下」

メリュジーヌが、俺とモルガン女王の間に割り込むようにして入って来る。そのままビビるぐらい一瞬で担ぎ上げられた

「それ以上は見過ごせないな」
「…ふふ、冗談だ」
「今日すごい冗談言いますね」
「たまにはな」
「……帰るよ、ベセト」

「あ、ちょ、失礼しまぁぁぁ!?」

そのまま超スピードで飛行して家まで連れていかれた

「うえ……酔う……」

「陛下にデレデレした罰だよ」

家に一つしかないベッドの上に寝転び、メリュジーヌの飛行によって酔った体を休める

「デレデレなんて……してたわ」

「そうだね。私が居るのに」

「……ごめん」

「…して欲しいこと、わかるよね?」

「……はい」

上体を起こして両手を広げ、メリュジーヌを受け入れる体勢を取る。それを見るなりメリュジーヌは嬉しそうな顔をしながら抱きついて来た

「……ベセト、幸せ?」

「……うん。お前がいるからな」

「私も幸せ。君に会えて良かった」

「俺も」

どちらともなくキスをする。舌を入れ合うような深いものではなく、ただ触れ合わせるだけの軽いもの。それでもお互い満足だった

その後直ぐに俺を眠気が襲ってくる。メリュジーヌも同じだったようで、二人揃って眠りに落ちた

そのまま二人眠ってしまい、朝の弱いメリュジーヌに昼まで離してもらえなかったのは別のお話